

哲學研究

第二百三十九號

第二十一卷
第二冊

地域的社會圈としての故郷と郷土

白井 尚

一

故郷と郷土との間に、深い類縁の存在することは、何人も認めるところであらう。併しながら、此の兩者が如何なる點に於て一致し、如何なる點に於て相異なるかに就いては、未だ明確なる解明が與へられて居ないやうに思はれる。他方また此の兩者が故國と淺からぬ類縁を有し、此等の間に明確な區別の立てられて居ないことは、諸國語が此等三者を、同一の言葉を以て表はす場合の多い事實によつても認められる。而して故國はまた明かに祖國に對して聯關を有するが故に、今此處に故郷及び郷土とは何であるか、またその歴史的運命如何に就いての考察を試することは、やがてまた故國乃至祖國の問題に對しても、一つの通路を準備する意義を有つであらう。

先づ故郷とは抑も何であらうか？ 此の問に對する答への手懸りは、故郷なる言葉が通常如何な

る意味に用ひられて居るかを知ることによつて與へられるであらう。今故郷乃至「ふるさと」及び之に相當する諸國の言葉に與へられて居る解釋を一瞥すれば、それが何れの國語に於ても略々一致して居ることが見出される。その一致せる解釋とは即ち出生の場所といふ解釋である。日本語のこきやう(故郷)は「己レガ生レシ地」^①と説かれ、支那語の故郷の解釋は「父母之邦也」^②と見える。ドイツ語の Heimat の解釋は「人の出生地 (Geburtsort einer Person)」^③、或ひは「父家 (Vaterhaus)」^④「他郷 (die Fremde)」に對する出生の場所又は土地 (Geburtsort od. Land)」であるから、日支の兩解釋を併せて居る觀がある。フランス語は故郷を表はすに國 (pays) 又は生れし國 (pays natal) なる言葉を以てし、又之に相當する patrie なる語に就いて見るに、「人の生れし土地 (pays où l'on a pris naissance) (pays où l'on est né)」又は「人の生れし町或ひは村 (ville ou village où l'on est né)」^⑤なる解釋が與へられ、全く日本語及びドイツ語の解釋と一致するのを見る。最後に英語の home に於ては、稍異り第一の解釋は「住處 (dwelling)」^⑥「人の住む場所又は地域 (the place or region in which one lives)」であり出生の場所なる説明は後方に位するに過ぎない。右の概觀を願れば、日獨佛の解釋は明かに殆ど全く一致して居ることが、先づ第一に注目し價ひする。故に最初に此の一致した「出生の地」なる解釋を考察の出發點とし、支那の解釋については後に觸れることにする。

故郷が三國語に於て齊しく「出生の地」なる説明を與へられて居るとは云へ、若しも故郷が出生と

いふ一回的にして一時的なる出来事、しかもそれに就いて己自らは何等知り記憶することもない出来事の行はれた場所に盡きるものであるならば、それは如何なる人にとつても、殆んど何等の意義も有し得ないことは言ふ迄もない。故郷が斯くの如き一時の出来事としての出生を、その意味内容の中樞とするものでないことは、例へば太平洋を航行中の船中に於て此の出来事が生じたとしても、大洋上の此の地點が故郷とは言はれないといふが如き、極端なる場合を思ひ合せた迄もなく明かである。故郷をして故郷たらしめるものは、右の如く抽象的に解せられた出生ではなく、これ以外のものでなければならず、此の出生以外の本来故郷をして故郷たらしめるものが、出生によつて一義的に決定され、或ひは通常出生と緊密に結合随伴して居ることに基づいて、出生がそれに不可分離的に随伴する限りに於てそれと一つになれるものの、代理乃至代表又は表徴として、故郷の説明に用ひられるのであるといふことは、何人にも推定されるところである。然らば出生の背後にあつて、本来故郷を故郷たらしめるものは抑も何であらうか？

今出生と時間的に結合するものを見れば、幼少年時代が直接出生に結合して居る。然らば幼少年時代と出生とは、空間的には如何なる關係に立つて居るか？ 現今に於ても、出生の土地と幼少年時代を過す土地とが同一である場合は少くないが、今よりも以前の時代、即ち故郷なる言葉が出生の地なる意味に於て長く用ひられ來つた時代に於ては、出生の地に於て幼少年時代の過されるのが

通例であつた。

大洋上の出生のみならず、幼少年時代の土地と異なる土地に於ける出生は、凡そ例外的なるものであり、従つて斯かる例外的出生は、出生なる言葉の意味の周邊に位するに過ぎず、出生は多く幼少年時代の過される場所に於ての出來事であつた。斯くの如く出生と幼少年時代とは、時間的空間的に、極めて緊密な關係に於て結合されて居た限りに於て、兩者は意味的にも直接聯關し、従つて出生なる言葉を以て、幼少年時代なる言葉に代へることは、簡明の故に極めて自然である。出生の土地が幼少年時代を過せる土地と、内容に於て同一であるとするならば、出生なる言葉によつて代理されつゝ、その背後にあつて、故郷の本來の基底をなして居るものは、此の幼少年時代を過すことであるのは、高度に蓋然的である。故郷は出生の場所なりと言ふ時の出生に含まれ或ひは之と結合して、故郷の本質を構成規定するものが、幼少年時代を過すこと以外に猶存在するとしても、出生と結合すること時間的空間的に然かく緊密なる幼少年時代の生活が、故郷の基底として極めて重要なものであることは、疑ふ可らざるところである。然らば故郷は、其處に於て幼少年時代を過されることによつて、如何なる構造特質を持つであらうか？

① 大觀文彦 大言海 第二卷

② 辭源 上冊 第十二版

- ③ Meyers Lexikon, 5. Bd., 1936. Der große Brockhaus, 15. Aufl. 9. Bd. 1931.
 ④ Wörterbuch der deutschen Sprache, von D. Sanders, 1860.
 ⑤ Dictionnaire de la langue française par E. Littré, 1873. Nouveau Larousse illustré, 6. tome.
 ⑥ The Century Dictionary, Vol. IV, 1914. Webster's Dictionary.

二

幼少年時代を過すことによつて規定される故郷の構造を問題とする前に、故郷は自己の出生の地或ひは自己が幼少年時代を過した場所であると言ふ時の、その地或ひは場所とは抑も何であるかを一應明かにして置かなければならない。此處に言ふ地乃至場所とは、單に等質的にして廣がりをするのみなる抽象的な空間ではなく、人が其處に生れ生を營む環境乃至生空間 (Lebensraum) でなければならぬ。凡そ人は他の人々と共に在るものであり、生はそれが交渉する對象の存在を豫想する。即ち地乃至場所とは生の主體とその對象なる存在者とによつて満たされた所又は地域である。地域乃至場所を充す此等の存在者の具體的存在は、夫々個性を有する個別的存在であり、従つて夫々獨自の特殊な意味を有する。併しながら此等の存在が全然錯雜混沌の關係をなして居るのではなく、無限に多様なる此等の存在は、相寄つて一種の統一的な纏まりをなし其屬の關係をなして居る。個別的なる存在の夫々の意味は異りつゝも、多數の個別的存在が齊しく何等か特定の普遍的意

味に配與 (teilhaben) することによつて、即ち此の意味的普遍者を自己の個性に従つて限定し、此の普遍者を種々異れる純粹性に於て、又種々異れる強度に於て、自己に實現することによつて、相互に其屬の關係をなして居るのである。

今此の意味的普遍者乃至歴史或は文化に於ける普遍者を、類型又は様式と呼ぶならば、特定の類型又は様式に配與する事によつて其屬する個別的存在者は、時間的にも空間的にも、略々特定の領域の中に在るのが見出される。今存在の斯かる其屬關係が展示する領域の區劃の、時間的なるものは即ち時代であり、空間的なるものは社會的空間乃至社會圏とも言ふ可きものとなる。後者は又種々に分たれ得るが、その一つに地域的なるものが考へられる。東洋と西洋、日本と支那の如きがそれであつて、此等の地域に存在するものは、夫々東洋的なるものとして特殊なる類型性を持つことによつて、別異なる纏まりをなして居る。此の地域的社會圏が水平的方向に於て區劃されるに對し、垂直とも言ふ可き方向に於ける社會圏の區劃が考へられる。その著しいものは現代に於ては階級、溯つては等族乃至身分、更に古代に於てはカスト等に於ける階層的區劃である。階級又は身分の相異すると共に、同一のものも異つた存在従つて意味を有つことは、社會圏の相異を指示するものである。此の外に猶性の相異その他に従つて、種々の社會圏が分たれ得るであらう。此等諸々の社會圏は相互に交錯してゐるのみならず、また時代と社會圏とが互ひに相交錯し、時代は社會圏

的廣がりを持ち、社會圈は時代的長さを持つことは云ふ迄もないが、茲に問題となるは、斯かる種々の時代又は社會圈が如何にして可能になるかといふことである。抑も何故に無数の個物が、特定の普遍者の下に共屬して、時代又は社會圈を可能ならしめるのであるか？ また時代乃至社會圈の成立崩壞の過程とその規定因素如何？ これ正さに時代又は社會圈にとつての基本問題である。

凡そ存在の根柢には人間の行爲があるといふことは、今や縷説を要せざるところであらう。もの存在は、此のものとの人間との交渉によつて定まるのであつて、人間乃至人間の存在者を離れたものそれ自身の存在とか意味とかいふものは、實は抽象的思惟の所産に過ぎない。此の考へに従ふならば、個別的存在が共屬の關係をなし、時代社會圈を展示するは、それ等の存在をそれたらしめる人間の個々の行爲が、特定の様式又は型に従つて共屬するからでなければならぬ。個々の行爲が配與する普遍的な行爲の様式又は型が、歴史的また社會的に異なるが故に、時代乃至社會圈の區別が生ずると考へられる。故に時代乃至社會圈の問題は、個々の行爲が何故に特定の様式に従ふのであるか、又斯かる行爲の普遍的様式が、何故に時間的空間的に相異なるのであるかの問題に轉ずる。デュルケムは此の問題を威壓強制によつて解かんとし、タルドは模倣によつて特定様式が普遍化し、模倣の波の交錯するところに發明が生じて、新たなる様式が生まれると説く。此等の説明は更に價値判斷や同化誘導等の説によつて補はれるとしても、何故に強制が行はれ何故に模倣の本能が働く

のであるかについては、十分の解明が與へられないのみならず、模倣強制も亦經濟的政治的乃至風土的その他種々の制限の下に立ち、此等の規定因素の作き及びその相互の關係が究明されることが必要である。併し此等の問題に立入ることは他の機會に譲り、今は只種々特定の普遍的様式が人間の行爲を支配し、その様式の相異によつて、時代乃至社會圈の差異が成立することあるを認めるに止めて、次にこれまで抽象的に論じたところを、一つの具體的事例に就いて明かにしやう。

出生の乃至は幼少年時代を過せる場所と言はれる時の場所は、右の地域的社會空間或ひは社會圈に屬するものであることは明かであるが故に、今此處には或るものの存在が、如何に地域の異なるに従つて相異し、同一の地域に在る多數の個物は同一の類型に屬すると共に、斯かる存在の其屬の根柢には、如何に同一の行爲様式が存在するかを、具體的に考察することとする。此の考察は生の従つて行爲の如何なる對象に就いても行はれ得可きであるが、幼少年時代の生活對象となり、また如何なる時如何なる所にも存在するが如き、一般的にして手近かな存在者を例とすることが、故郷の論にとつては適切であらう。故に假に雀なるものを例にとることとする。今雀の存在について見るに、先づ超時間的超空間的なるが如き存在の部分が見出される。動物學の與へる雀の定義の如きは之を表す。併しながら斯かる自然科學の對象となる存在の普遍的部分が、抽象的な交渉の所産たる所謂缺損の様態(modus deficiens)であるのみならず、斯かる普遍的存在部分を定立する自然科學的

な雀との交渉の仕方そのものは、近代的なものであつて、現在と雖も世界の一隅には、雀を超自然的な存在者例へば呪術信仰の對象とし、動物學的な雀の形態以外の形態屬性をも執り得るものとして、之を崇め或ひは怖れる人間集團の居住する地域のあることの可能性は否定出来ない。

併しながら雀には、自然科学的存在の遍在する領域の内部に於ても、地域的社會圈の相異するに従つて相異する存在の部分がある。日本に於て雀と云へば、それは雀の大きさや羽の色といふが如き、あらゆる雀に共通な要素から構成されて居るものであるよりも、先づ第一にチュウチュウ鳴くものであり、第二に竹藪に集るものであり、更には朝早くから囀るものであらう。然るにドイツで *Spatz* と云へば、小路 (*Gasse*) に於ける動物の生活を、その意味的構造の中樞として居ると云はれる。斯くの如き雀の具體的存在の、地域による同一と相異とは如何にして生ずるのであらうか？

これは日本人とドイツ人との行爲の様式の中でも、特に日常的にして重要な食ふ行爲住む行爲等の様式が、相互に異なるところから來るのである。雀が穀物を餌として生きて居ることは、如何なる國に於ても同一であつて、これは雀の自然科学的存在を構成するものであるが、併し穀物はあらゆる國に同様にあるものではなく、特定の地域に住む人間の生活が配與する生活形式によつて、穀物のあり方は夫々相異して居るのである。穀物を常食とする東洋、特に日本に於ては、平地の大部分には穀物が作られる。故に日本にあつては、雀は人が住み穀物を作る人里には到るところに居て、人里

離れた深山幽谷には居らない。然るにドイツでは、雀の好む穀物たる米が里にも無い。これはドイツ人が米を常食せず、むしろ肉の副菜として稀に用ひることを、食ふ行爲の様式として居ることによる。しかも氣候その他の關係から、此の儘かに用ひられる米も、皆南方の溫暖な外國から輸入される。従つてドイツでは平原にも米田がなくて牧場があり、爲めにドイツでは日本のやうに、雀が野の面で糶を啄むことが出来ない。更にまた餌の少いドイツには、雀が日本のやうに澤山は居らず、居る少數のものも、牧場では餌を得る機會が少いので、どうしても人の住む所の近くに居て、人の落したものを捨てたものを捨て生きて行かなければならない。人の落したものを棄てたものは、人の集り住む所に多く、落したものを捨てたものがその儘に放置されて、雀の捨ふに任せられるのは裏小路の如き所であり、又斯かる處は人通りが繁くないが故に、大通りよりも雀の餌を捨ふことの妨げられる可能性も少い。斯かる事情からドイツでは一般に、人が雀に遇ひ雀を見掛けるのは、主として小路に於てあるといふ事情が生ずるのである。斯かるドイツといふ地域的社會圈に住む人々の雀に對して持つ交渉の様式の特種性から、小路生活を意味の中樞的構成要素とする、特殊な *Spatz* なる言葉の意味が出来て來たものと思はれる。

日本なる地域的社會圈には、日本人の常食と氣候の關係上、稻田が多く、従つて雀の餌が豊富であるから、雀が多く、此の多く居る雀は小路よりも田圃に居るのであるが、併し最も雀の目立ち易

いのは、人家の周圍であり、その中でも特に朝夕雀の多數集つて囀る竹藪が、雀と不可分離的に結合され、遂に竹藪が雀の日本に於ける地域的特殊性ある存在の構成要素となつたものと思はれる。斯くの如き地域的特殊性ある雀と日本人との交渉は、更に種々なる特殊性を分化し出す。即ち一方に於ては東洋に於ける繪畫の花鳥を題材とする傳統的な様式の特异性に従つて、日本畫は好んで雀を題材とするのであるが、此の時の雀は多く竹に配せられた雀である。更にまた日常不斷に接する雀は歌や物語りに取入れられることも多く、此等に取り入れられる雀も亦、多く竹に集る雀である。斯くて日本社會の成員は一般に、實生活に於ても、また繪畫や歌謠物語りに於ても、單なる雀乃至動物學的雀には非ずして、竹藪の雀を見經驗することが最も多い。各個の日本人と雀との交渉は、夫々具體的には相異してゐても、竹に配せられた雀と交渉するといふ點に於ては一致して居るが故に、此處に日本なる地域の社會圈に特有な雀の存在が成立したのであらう。

斯くの如く日獨兩國人の行爲様式の相異に従つて、雀なるものも其の具體的存在を異にするが、茲に一つ注意すべきは、斯く地域の社會圈の相異に従つて相異する存在の特异性は、夫々の地域を自己の生空間とするもの、即ち、その社會圈に所屬する成員以外のものには、其の儘に把握され難いといふことである。日本人が率然として小路を意味的中樞とする雀なるものに就いて聞いても、直ちにこれを具體的に了解することは困難であらう。またドイツ人にとつては、竹藪の雀の如きは、

全く想ひも及ばぬ觀念であつて、日本的な雀の意味は、多小説明されても到底了解出来ないであらう。何となれば寒國なるドイツには竹の如きは全く成長せず、ドイツ人が竹に接し得るのは、恐らく先づ第一に杖としての竹であらう。葉の繁つた儘の竹や竹藪、まして苟の如きに至つては、全然彼等の想像を絶したものと云ふも過言ではあるまい。故に竹に雀と聞いても、杖に止まる雀を想像して、奇妙滑稽に感ずることはあり得ても、日本的なる雀の存在に近づくことは出来ないであらう。更に朝早く囀る雀、チュウチュウ鳴く雀も、また日本的なる雀であつて、日本社會の成員にとつては、誰にとつても雀は斯かる存在を有するものであるが、日本なる地域以外に生活するもの従つてドイツ人にとつては、これも亦奇異にさへ感ぜられる存在部分であることが可能である。此の相異も亦、日本人と外國人との行爲の様式の相異から來るのであつて、特に家屋屋敷村落の構造様式の相異に基づくと考へられる。ドイツ人は屋敷の周圍に垣や塀を設けることが少く、生垣を作り庭木を植ゑることも少い。斯かる屋敷を單位として構成される村落の形態がまた密集村落の形式を有ち、各屋敷は散在せずに密集する。各々の家を圍む樹木や垣が無いから、家と家が相接して道の兩側に並び、一種の小路が此處にも形成される。しかも各々の家の構造がまた、何れもドイツ的な様式に従つて特殊性を持つことによつて其屬の關係をなして居る。即ちドイツの家の窓は硝子窓であり、寒國なるが故に多く二重窓となつて居て、その外側にはなほ雨戸が下され、内側にはカーテンが引かれる。

斯かる構造のドイツの家が、屋外の雑音を防ぐことに於て優れて居ることは明かである。さて元來ドイツには、風土と常食の關係上雀が少く、その少い雀は、周圍に聳を求む可き木も竹も無く只互ひに相接して並立する家の、窓の邊に來て聳る可き可能性が少く、稀に聳ることありとするも、その聳りは朝の物靜かな時に於ても、屋内に這入つて人の注意を引き得る可能性を、家の構造によつて奪はれなければならぬ。此等の事情よりして、朝の雀の聳りは、ドイツ人の關心の對象となる可き可能性に極めて乏しく、従つてまた此の聳りが、歌や物語りの中に入取られる可き可能性も亦存在しない。日本に於ては事情は異なる。村落形態は多く密集的ではない。孤立散在する屋敷の周圍には、竹藪や種々の樹木がある。穀物多きが故に多い雀が、此等の竹藪や樹木に聳を求め、此處に曉の靜寂を亂す可能性が多い。然るに家屋の構造を見れば、紙障子に木の板一枚の雨戸の外、屋外の響を防ぐべき何物も無い、故に雀の朝の聳りは、日本人の耳には極めて達し易い。朝毎にチュウチュウといふ鳴聲を聞くといふ特殊な交渉の仕方が、日本らしき村落屋敷家屋の構造の形式等の、多數の行爲様式の故に、多くの日本人に於て普遍的な、雀との交渉の仕方となり、従つて日本なる地域的社會圈に於てある雀は、チュウチュウ鳴くものであり、朝早く聳るものとなるのである。チュウチュウ鳴き朝早く聳る雀が、歌にまた物語りに取入れられ、日本人はまた此等に於て、日本に特有な雀と交渉を重ね、益々日本に特有な雀の存在を固めるのである。同時にまた、斯かる交渉の仕方を持

つことなきドイツ人にとつては、雀に於ける朝の囀りは或ひは意外であり、鳴き聲を中樞とする意味構造は、子供らしく滑稽に感ぜられ得るであらう。

最後に、日本人には小鳥を喰ふといふ行爲の様式がある。焼鳥はむしろ美味馳走の部に屬する。雀も亦焼かれて食卓に上る。雀を捕へることを職とする者すらある。即ち小鳥従つて雀に對する、焼いて食ふといふ交渉の仕方が、日本なる地域的社會圈には一般的であり、小鳥従つて雀は一般に焼いて食はれるものである。然るにドイツ人は、一般に斯かる様式に於て小鳥と交渉をすることはない。却つて小鳥に餌を與へる。長くて寒さの嚴しいドイツの冬に、大地が雪に蔽はれて小鳥の啄むべきものが見出されない時は、小鳥は飢えて雪の上に屍を横へることが少くない。これを憫んでドイツ人は小鳥に餌を與へることがある。都市の郊外の丘の上などで、小鳥に與へる餌を鬻ぐ老人を見受けることのあるのは、小鳥を捕へることを職とする者あるとよき對照をなす、此の飢えて死するを憫み、之に餌を與へるといふ交渉の仕方を小鳥に對して持つドイツ人は、日本的な小鳥のあり方が、焼いて食はれるといふ特殊性を持つことを聞く時は、斯かるあり方を成立せしめる日本人に對して、一種の悔蔑更には反感さへ感ずるかも知れない。併しながら小鳥との交渉の斯かる相異、従つて小鳥の存在の斯かる相異は、社會の構造の相異から來るところであつて、日本の風土が小鳥を飢えて死なしめざるのみならず、小鳥の食物を豊かに恵む上に、日本人は自己特有の食物耕作等の様式

の故に、小鳥の食物を一層豊かにする。故に日本の社會は、小鳥に多量の餌を供して彼等を繁殖せしめるのであつて、斯くて繁殖せる小鳥を食卓に上せることは、野を牧場として繁殖せしめた家畜の肉を食ふこと以上の蠻風と見らるべきではない。然るにもかゝはらずこれを不快な蠻風と感ずるならば、それは自己の地域的社會圈に存せざる行爲の様式や、これによつて成立するものの存在の特殊性を、それが自己のものと異り、それに自己が馴れざるが故に不快と感じ反感を抱くものと言はなければならぬ。

以上雀の例に於て、ものの存在がその於てある地域的社會圈の相異するに従つて相異すること、此の存在の相異は、此のものとその社會圈を構成する人間との交渉の仕方の相異に基づくこと、而して直接の交渉の仕方は、同じ社會圈に支配する無数の他の行爲様式によつて規定されて居ること、更に、一地域的社會圈の構成員は、他の地域的社會圈に於てあるものの具體的存在を、その具體性に於て正しく把束することが困難であり、斯くその具體的存在をその儘把束し難き存在は、往々にして奇妙に感ぜられ不快を覺えしめ、更には反感さへ抱かしめ易いことが明かにされた。雀に就いて見られたことは、他のあらゆる存在者に就いても見られることは言ふまでもない。また此のことは地域的社會圈の相異に於て認められるのみならず、垂直的社會圈の相異や時代の相異にも亦當て罷まることも、改めて論ずるまでもないであらう。例へば、鳥の飛翔は豫言前兆の力あると信じてゐ

た古代のローマ人が、avisなる言葉に於て思ふところは、鳥の飛翔を遙げさと憧憬の象徴とする現代のドイツ人が、Vogelなる語に於て思ふところと相異すると言ふが如きも、地域時代の相異に従つて相異するところの、人ともとの交渉の仕方の相異よりする、ものの存在の相異を表すものである。

斯くの如くものの具體的存在の特殊性の基礎をなす人間の行爲の様式は、食物村落形態屋敷の形式家屋の構造耕作方法等の何れをとつて見るも、一つとして純粹に個人的なるものとはではない。それは決して個人が單獨に作り出したものではなく、また個人の出生、死去によつて滅びるものでもない。更にまた個人が恣意的に破壊改變することの出来るものでもない。否しかのみならず個人は自己の思ふが儘に此等の様式に従ひまたは背くことさへも出来ない。個人が欲すると欲せざるとを問はず、個人はこれに従ひ、自己の行爲をして此等の行爲の様式に配與せしめなければならぬ。此等の特定行爲様式は、何れも夫々の時代夫々の社會圈に生活する人々を強制し又は誘導して、個々の行爲の何れをも自己に従はしめ規定し、何れの行爲にも現はれるものである。それは此の又は彼の個人の様式ではない意味に於て、何れの人の様式でもないと共に、此のまた同時に彼の人の行爲がそれに配與し、それを夫々個別的に具體化して居る意味に於て、凡ての人の様式である。即ちこれは、個々人のものではなくして、社會集團のものである。即ち此等行爲様式の根柢には、個

人が存するのではなくして、社會集團が存し、これが相異するに従つて、またものの具體的存在が異なるのである。存在の根柢にある人間は、正に人間集團である。而して此の集團は決して、人類一般乃至社會一般の如き、抽象的な一般者又は普遍者ではなく、時代的社會圈的に分化し相異する特殊者であること、右に明かにした如くである。ものの存在は、常にそれが於てある時の異なるに従つて、歴史的に變ずるのみならず、またその於てある社會的空間の異なるに應じて、社會的に相異する。ものの存在従つてもこの意味は、時空を離れてそれ自身の超越的同一性を有するものではない。

特殊に分化し對立して居る社會圈の相異は、夫々のものの具體的存在従つて意味の相異に現れ、此の相異を透して把握され得るのであるが、夫々のものの具體的な存在を把握するには、その於てある社會圈に特有な行爲の様式に従つてそのものと交渉しなければならぬ。ものの存在を成立せしめた特殊な行爲様式に従つて交渉して居るものにあつては、此の様式の支配する社會圈に於けるそのものの具體的存在が、把握され了解されて居ると共に、同一様式に従つて交渉せざる者には、此の具體的存在は了解されないことは明かである。而して此の様式は個人のものではなくして社會集團のものであるが故に、此の集團の成員は、自己の欲すると欲せざるとにかゝはらず、同一様式に従つて行爲しなければならぬ。従つて一社會集團の成員は、個人的にもその存在を把握するのではなくして、他の成員と共に他の成員と齊しく、同一の存在を把握了解するのである。斯かる了解

の社會性を次に少しくハイデッガーの了解及び傳達の論と結合して明かにして見度いと思ふ。

ハイデッガーの存在論が人と人との關係を人間からでなく道具から出發して説かんとすることや、人間の存在者の本來的存在の性格を常に自己的 (je meinig) なものとする事、又死と言ふも個人的死であること等よりして、人的存在者の社會性を明かにして居ないことは、屢々指摘されることであつて、氏の所説が未だ幾多の不徹底と不整合とを包藏して居ることは、否まれないところであるが、氏はまた他方人間存在の共同性を強調して居る。即ち先づ差當り孤立的にして他人なき自我があるのではなく、人間存在は本質的に常にそれ自身に於て共同存在 (Mitdasein) であり、人間存在の世界は共同の世界であつて、世界内存在は他人との共同存在であるとする。従つて孤立存在は共同存在の缺損の様態であり、人間存在は本質的に共にする氣分と了解 (Mitbehdlichkeit u. Mitverstehen) の中にあると説き、其處従つて世界の存在を他人と共に構成する了解 (das Sein des Da überhaupt mitkonstituierendes Verstehen) を説き、吾等^④はもともと既に他人と共に存在者に於てであると論ずる。斯くの如き人間の存在の共同性は、人間の存在が行爲従つても乃至存在者との交渉の様式を、その都度常に他人の様式と等しくすることによつて可能となるであらう。人が個人我のものならざる、社會集團のものなる行爲様式を、之に個人的限定を加へつゝも、他人と同様に自己の行爲の様式とする限りに於て、人は他人と共に行爲し、此の行爲によつて成立つものの存在を、他人と共に構成

し了解すると言ふことが出来る。集團的な様式に従つて食を採り家を建て屋敷を營み耕作し收穫し、鳥や木や野や山を扱ひ解する限りに於て、他人を見ることなく他人を思ふことなくとも、その人の行爲従つて存在は集團的従つて共同的社會的である。此の故にこそ、事實的人間存在が時に他人に向つて居らず、他人を必要としないと思ひ、他人無しに濟ませても、それは共同存在の仕方^⑤に於てある、と言はれるのであらう。

共同存在に於て他人と行爲の様式を同じくし従つて行爲によつて成立つ存在の了解を同じくする限りに於て、他人の生内容は我のそれと同じくなり、我を了解することは即ち他人を了解することになる。故に人間的存在者の存在了解には、彼の存在は共同存在なるが故に、既に他人の了解があり、共同存在と共に、他人の開示は既に初めから構成されて居るのである。^④斯く考へ來れば、傳達(Mitteilung)の存在論的構造も自ら明かとなる。ハイデッガーに従へば、傳達とは共に分ち合ふこと(Mit-Teilung)であり、共同存在の共にせる氣分及び了解を分つこと(„Teilung“ des Mitbefindlichkeit und des Mitverständnisses des Mitseins)である。傳達は決して體験例へば意見や欲望の、一主體の内界から他の主體の内界への輸送(Transport)の如きものではない。人間的存在者が語りつゝ自らを表白するのは、それが先づ差當り内なるものとして、外部に對して蔽はれて居るからではなくして、反つてそれが世界内存在として了解的に、既に「外に」あるからである。^⑤人が他人から分離して孤立

的に存在し内が外から隔絶されて居るならば、何故に語るることによつて、此の分離隔絶が克服されて、孤立する個人の體驗が他の孤立する個人に傳へられるかは解明されない。傳達は内と外、自我と他我との離隔分立の無いところへのみ可能である。分立せる個人我を考へ他人の中への自我の投射を説く感情移入論への、ハイデッガーの非難は當然である。人が了解的に外にあり、他人と共に了解することは、人がものに對してなす交渉の様式が、彼一個人の内なるものではなくして、彼の外なる他人をも包括する社會集團のものであるが故に可能なのである。此の同一の仕方にて於てする交渉の對象の存在が、同一社會集團に屬する人々に對しては同一であり、斯く既に等しく共に把握了解されて居るが故にこそ、一人のこれについての言表が他人に把握され得るのである。言表の根柢には既に共同の了解がなければならぬ。これ即ち、共同存在は話に於て「顯はに」分割される、即ちそれは只分割されないのみで、把握されず所有されざるものとして既に在るのであると言はれる所以であらう。^⑦

併しながら、斯くの如きものとの交渉の仕方乃至行爲の様式の共同性は、時代的社會圈的に限定されて居る。それは決して普遍的人間的なものではない。ハイデッガーは此のことに注意して居ないのみならず、共同性の分析そのものに徹して居ない爲めに、個人我と解せられ易い人間的存在者を直ちに世界と對立せしめ、其の間に、世界を特殊化しながら個人を包括する社會圈を置くことを

して居ない。他方また存在を専ら時間的にのみ考へようとする結果、彼の被投性 (Geworfenheit) の如きも、只時間的にのみ説かれるのであるが、了解はその都度既に一定の諸可能性の中に陥つて居ると言ひ、人間的存在は實存論的に被投性に引渡されて居ると言ふ時に、人間の行爲と了解は、只單に過去の規定されて居ると見るのみでは不十分であつて、社會圈的限定をも併せ考へなければならぬ。事實的存在可能の範圍 (Spielraum des faktischen Seinkönnens) は、常に時間的のみならず社會集團的に限定され、特定集團内に於ては、その集團にある行爲の様式以外の様式を執る可からざることを併せ考へなければならぬ。斯く行爲の社會的限定を考へる時、傳達即ち見つゝ共に分ち合ふ區域 (Umkreis des schenden Mitinanderteilens) の如きも存立し得、^⑤ 其の擴大とは此の範圍に支配する行爲の様式に従ふ人間の増大と、その人間の住む地域の擴張と解することが出来る。人は只時間的にのみ限定された世界の中に投げ込まれるのではなく、世界はまた水平的垂直的に分化し特殊化された社會圈から成つて居る。その如何なる社會圈に人が生れ、如何なる社會圈に於て人と成るかによつて、常に彼の行爲乃至氣分と了解は限定されるのであり、彼の交渉の對象たる人及び物の存在も亦同様である。世界内存在は時代的にして同時にまた社會圈的なる存在である。人間的存在者の有限性は、常に死に於てのみならず、また出生に於ても、顯はにされべきである。併しながら個人の事實的行爲は、それが従ふ様式によつて、一義的に決定されるのではなく、個

々の行爲は何れもそれが従ふ様式を、種々の偏差に於て自己に實現するのであつて、様式はたゞ個別化の範圍を表すに過ぎず、その範圍内にある何れの可能性が選ばれ、それが如何に現實化されるかは決定しない。而して人間は、自己の行爲とそれが従ふ様式との此の關係に就いての自覺を持ち、特定様式の個別化を意識的に行ひ、様式の設定する可能性の事實的範圍内に於て、何れの可能性を選び之を如何に實現するかを、自ら決定することが出来る。此の選擇様式の個別化は正さに個人的であり、その都度その個人の決定することである。併しながら此の様式の事實的個別化は、決して様式からの脱却といふ意味に於ける純個人的なものではない。それは飽く迄時代的社會圈的に制約され、特定の様式の地盤の上に於てのみ可能である。他方また此の個々の行爲とそれの従ふ様式との關係は、必ずしも常に顯はに意識されて居るとは限らない。否多くの場合に於て、人は之を明かに意識することなく、その限りに於て盲目的無自覺的に、様式に従つて行爲する。此の盲目性無批判性無自覺性の故に、斯かるあり方を他人との共同存在への没入、存在可能性の平坦化、日常無記の平均性等と呼ぶことが出来るかも知れないが、斯かる無批判的^⑩なあり方を脱することが、共同存在そのものの棄却破棄となることはない。自己の行爲とそれが従ふ様式との關係に就いての意識の有無、即ち自己の行爲に就いての自覺の有無はまた、所屬社會圈的地域の限定によつて制約され、地域的社會圈的の廣狹、またそれの開放性と封鎖性とに直接關係し、重要な問題を形成するけ

れども、今は此の問題に立入る暇がない。

行爲とそれが従ふ様式との關係はまた、その様式の支配する社會圈に在る個物の存在と、その配與する普遍的類型との關係に現はれる。特定の社會圈に在るものは、此の社會圈に特有な類型に配與する事によつて共屬するけれども、個々の存在は斯かる類型的普遍者を、純粹性や強度を異にしつゝ、個別的に自己に於て實現して居る。其の具體的存在の了解は、此の類型的個別的限定の把握でなければならぬ。此の存在の個性の把握は、種々の規定因素を持つであらうが、此の個物と事實的交渉の反覆は、その都度存在のそれ迄觸れざりし部分に觸れられつゝ、具體的了解を進めて行くであらう。又斯かる交渉を存在の諸々の方面に亙つて行ふにつれて、その個物の了解の具體性は益々多くなる可きであらう。

以上の考察によつて、幼年時代を過せる場所と言ふ時の場所は、社會圈の一つなる地域的社會圈であり、之は特定社會集團の持つ行爲様式を基とする特殊なる存在類型に配與するものの在る地域的範圍であること、従つてまた此の場所に於てあるものの了解は、此の地域にある社會集團に特有なる行爲の様式に従つて行爲する限りに於てのみ可能なることが明かになつた。勿論斯かる行爲の様式は無數にあつて、その支配は夫々範圍を異にする。即ち或る様式に従ふ人間は多數であり、他の様式に従ふ人間は少數である、また或る様式に従ふ人間は廣い地域に在り、他の様式には狭い地

域内の人間が従ふに過ぎない。また各々の様式への従ひ方の純粹性にも種々の度合がある。従つて一般に社會圏の限界は明確一義的に定めることは出來ず、支配する様式又は類型の數により、または様式や類型の部類によつて、相對的に種々定めることが出來るであらうが、一般に社會圏の封鎖性の大なるに従つて、その社會圏の占有する地域を超えて、他の地域迄共通に支配する様式や類型が少く、その社會圏に特有なる様式や類型の地域的限界は明瞭であらう。同時に此の限界内に在るものが、その外に在るものに對して有つ特異性は大に其屬性は微少でなければならぬ。又一定地域に支配する様式類型の數に着目すれば、一定の地點から遠ざかる程、此の地點に支配する様式類型の支配はその數と強度とを漸次減するであらう。即ち一般に地域が狭い程その地域の全體を等しく支配する様式や類型の數は大になるであらう。

場所即ち地域的社會圏に就いては、詳論を要する幾多の問題があるけれ共、今は全て之を略して、幼少年時代を過す場所の考察に進まなければならない。

① H. Ammann, Die menschliche Rede, I, Teil, 1925, S. 107, 116.

② Ibid. S. 94.

③ M. Heddeger, Sein und Zeit, I. 2. Aufl. 1929, S. 118ff. 162, 143.

④ Ibid. S. 123.

⑤ Ibid. S. 162.

⑥ Ibid. S. 124 f.

⑦ Ibid. S. 169.

⑧ Ibid. S. 144.

⑨ Ibid. S. 155.

⑩ Ibid. S. 43, 125, 127, 129.

三

故郷が地域的社會圈の一種であるとするならば、此の社會圈は、それに於て幼少年時代が過ぎる生空間であるといふことよりして、如何なる限定を與へられるであらうか？ 幼少年時代の生活が持つ空間的地域の限定の特質として擧げらるべきものは何であらうか？ 此の限定も種々あるであらうが、惟ふにその主なるものとしては、その生空間即ち地域が極めて狹隘であること、またそれが封鎖的であること等が擧げられるであらう。

先づ幼少年時代にあつては、自己の行爲の對象となるものの於てある地域は、自己の父母の家を中心として、之から自己の足を以て行きまた戻り得る範圍である。此の範圍が極めて狹く限定されて居ることは明かであり、而して此の狹い範圍内に在るもの、及び此の範圍内にある自己の視聽に達するもののみが、即ち自己の行爲交渉の對象である。斯くて幼少年時代の生空間は、地域的に極めて狹く、従つてそれに於てある存在者も極めて少く限定されて居る點に、一つの特質を有すると

言ふことが出来るであらう。次にまた此の時代にあつては屢々斯く封鎖された範圍の外に出て、此の地域の外に在るものと交渉を持つことを必要とする業務も交際も無く、また此の地域の外から來つて訪れるものも極めて稀である。従つて此の地域内に在るもの以外に就いては、何等の關心も持つことがない。故に此の限られた地域外に在るものは無に等しく、幼少年時代にあるものにとつては、世界は此の限られた地域と之に於てあるものによつて構成されて居る限りに於て、封鎖性を持つて居ると言ふことが出来るであらう。勿論、山の彼方から來る商人や地平線の外から來る旅人、更には春來り秋去る鳥の如きも、此の時代の接觸の對象となるのであるが、此等のものも此の時代に於ては、此の限られた地域の外にあつて何を營み何であるかに就いては、現實的關心を引くこと稀である。此の意味に於て此等外來者は、此の生空間の封鎖性を破り、またこれをその本來の限界の外迄擴げ及ぼすことなきものと見ることが出来るであらう。

狹隘性と封鎖性とを根本特質とする幼少年時代の生空間は、此の地域に生れ此處に育つ者と、此の地域に於てある人及びものとの交渉了解を如何に特質づけるであらうか？ 幼少年時代はまた未成年の時代と言はれる。此の時代は未だ何に成らざる時代であらうか？ 恐らくそれは未だ人とならざる時代、人として備へる可きものを備へざる時代であらう。然らば人と成る爲めには何を備へるべきであるか？ 人となるとは人として行爲し得るに至ることであり、人として行爲し得る爲め

には、人としての行爲の様式を持たなければならない。未成年時代に於て未だ成らざるものは、即ち此の人としての行爲の様式であらう。然らば未成年者は如何にして此の人としての行爲の様式を、自らに於て成らしめるのであるか？ 彼はこれを自分一個の力を以て、恣意的に作り出すことは出来ない。生具の様式とも言はる可き本能と雖も、長き種族生活の結晶であり、しかもそれはその儘に働き出るのではなくて、種々の特殊的具體的限定の下に働き出るに過ぎない。斯くの如き限定を加へ、あらゆる方面の特殊なる行爲様式を與へるものは社會であり、しかもそれは社會一般ではなくして、社會圈的に分化し特殊化されて居る社會集團であることは、先に述べたことによつて自ら明かであらう。

未成年者は未だ行爲の様式を何等持たず、或ひは既に獲得したのも未だ確立しては居ない。此の未成年者が自然的無意識的に自ら進んで、自己がその中に生活する社會圈に支配する行爲様式を獲得する重要な過程は模倣であり、教育とは人爲的意識的に、特定社會圈を支配する行爲様式を未だ獲得せざる者を、之を獲得するべく誘導することである。また斯く社會的様式に従はずして、未成年者が獨特の様式を作り出さんとしても、社會はこれに種々制裁を加へ、社會に共通なる様式を強制的に課する。斯くて未成年者は、彼の屬する社會集團によつて、その集團の持つ行爲様式を自己の行爲様式とする人として、作り上げられて成年者となるのである。

未成年者を成年者たらしめる社會集團は、必ず特定の地域を占める。此の地域と未成年者の生空間、即ち幼少年時代を過す場所とは如何なる關係をなすのであるか？ 幼少年時代の狹隘に限定された生空間は、未成年者を人にまで形成する社會集團の占める地域より狭いであらうが、此の狭い未成年者の生空間の中には、凡ての彼を人たらしめる行爲の様式が無ければならない。言ひ換へるならば、未成年者を成年者たらしめる行爲の様式は、幼少年時代の狭い地域内に存在するものであるが、此處に見出される此等の様式の支配する地域即ち此の様式を持つ集團の地域は、此の狭い地域を超えて居り、しかも前述の如く個々の様式の支配する地域は廣狹種々相異して居る。而して幼少年時代の場所から遠去かるに従つて、此の場所にある様式の支配は其の數と強度とを減じ、此の場所になき他の様式が増しまた其の支配の強度を高める。併しながら幼少年者はその生空間の封鎖性の故に、彼が其處に生を受け其處に生を育まれる地域に支配する行爲の諸様式のみを、自己の全ての行爲様式として人と成る。然るにまた此の地域に在つて彼の交渉の對象となるものも、同様に全て此の地域を支配する行爲の様式に従ふ交渉の對象として、自己の存在のあらゆる方面を成立せしめられたものでなければならぬ。故に此の時代に於ては交渉の主體も客體も、また同一の様式を基底として形成され、従つて主體は如何なる對象の如何なる存在の方面に於て之と交渉すると、常にその存在をそれたらしめた交渉の仕方、に於て之と交渉するのである。従つて彼は常に交渉

の對象を、それが支配する存在の類型に於て扱ひ把握し了解し得るべきである。

しかのみならず、幼少年時代の狭い生活地域に存在するものが、極めて少く限定されて居るが故に、此の場所にあるものは何れも交渉の對象となり易い。何となれば生はその交渉の對象を、斯く少數に限られたものの中から常に見出さなければならぬが故に、此等少數のものは何等かの機會に交渉の對象とされ易いであらう。而して斯く直接交渉の對象となるものは、常にその類型性に於て了解されて居るのみならず、更にその類型を個別化して實現せる個性に於て具體的に把握了解される蓋然性が高い。しかも或る行爲の對象たる可きものが少く限定されて居る限り、同一のものが反覆的に對象となり、斯く反覆される此のものとの交渉は、その都度此の對象の存在の、それ迄觸れざりし部分に觸れる。即ち一つの様式に従つてなされる交渉も、反覆されるに従つて、此の様式を基とする存在を個別化せる具體的存在の、細部に迄把握了解を及ぼし、了解の直觀性を増大する。他方また斯かる具體的直觀的了解は、常に存在の特殊領域にのみ限られず、種々の領域に互ふことも亦、此の限定された生空間に於ては可能である。何となれば生がその活動の領域の異なるに従つて、夫々異なる存在者を對象となし得る程多くの存在者の無き場所に於ては、同一の存在者が種々の領域に於て對象とならなければならぬであらうから。斯くて此處に於ては、同一存在者が、例へばたゞ遊戯の對象となるのみならず、また宗教藝術道德法律等種々の領域に於て、交渉の對象となる。

即ち此の場所に於てあるものとの直接具體的な交渉従つて了解は、一面的抽象的ならずして、多面的となることが蓋然的である。

右の如くにして、人が生れ幼少年時代を過して人と成つた場所が、その地域的限定の故に有つに至る特殊性は、次の如くに要約されるであらう。即ち此の場所はそれに於てあるものがその存在の各方面に互り、しかも夫々の方面の細部に迄及んで、此處に支配する様式を自己の行爲様式とするものによつて、把握され了解される場所である。換言すれば、此の場所にあるものに就いては、此處に生れ此處に育つた者によつて、多面的にして具體的直觀的な把握了解が行はれ、彼は其處に於ける交渉の對象に於ては、未知なる存在部分を見出す事が少い。斯くの如きが即ち故郷である。

幼少年時代を過す地域に就いての右の形式的な考察の妥當性を明かにする爲めには、此の時代の生活の地域的限定を時間的空間的に廓大して展示する社會圈が、右に幼少年時代を過す地域が有つとされた諸特質をまた廓大して展示する事を示すが適切であらう。此の爲めには先づ未開人社會が注目し値する。幼少年時代の生活と未開人の生活とを、一方から他に類推する事の危険は、屢々論せられるところであるが、未開人社會は、幼少年時代の生活と同様の地域的限定即ち封鎖性と狹隘性を持つものであり、少くとも此の限りに於ては、個體發生 (ontogenesis) は系統發生 (hylogensis) を繰返すといふことが當徹まるが故に、此の空間的限定から生ずるとされた幼少年時

代の行爲の特質、即ち交渉の對象の存在把握了解の多面性具體性直觀性が、未開人の生活に於ても、廓大されて展示されるべき筈であらう。

原始的群族の封鎖性も詳論を要する問題であるが、一般に未開社會集團が封鎖性を有してゐたことは、通説の認めるところである。而して此の封鎖的集團の占有する地域が、極めて狭く限定されて居たことも亦、此の集團の成員數や此の集團に於ける交通の發達等を併せ考へれば、直ちに明かである。但し人類社會發展の第一段階は、通常狩獵と漁業との段階とされて居るが、此の段階にある群族は、一定の居住地を有たず、夏期には不斷に移動し、只冬期にのみ一定の場所に居住したものが少くない^①。斯かる群族の占有する地域は廣いとも云はれ得るが、斯かる群族がその都度占有する地域は廣いものではない。又封鎖性によつて斯かる群族の成員は常に一定であるが故に、一方に於ては交渉の對象の主要部分たる人が一定同一であると共に、他方に於ては此の集團の行爲様式を荷ひ之に従ふ成員の一定の故に行爲様式も一定であり、従つてまた此の様式の下に行はれる交渉の對象としての物の部類も亦同一である。斯くて此の集團の占有する地域が廣汎であつても、成員の交渉の對象は同一乃至同部類に屬するものなるが故に、此の集團の占有する地域は狭いに等しいと言ふことが出來やう。しかのみならず原始段階たる漁獵の段階の次に來るものが、牧畜及び農耕の段階であつて、一般に特に農耕を行ふことによつて、人類は土地と結合され定住するに至つたと

はれて居るが、果實草根等の植物性食物の蒐集を行つてゐて、未だ本來の農耕を行ふに至らなかつた群族が、既に定住して居たことが少くない。即ち農耕が定住の前提ではなくして、定住こそ農耕の前提であつた。故に定住は社會發展の早期から、既に或る程度迄行はれて居たと言ふことが出来る。斯くてまた一般に、早期社會集團の占有せる地域が狹隘であつたと言ふことが出来るであらう。未開人の社會生活が幼少年時代の生活と等しい地域的限定、即ち封鎖性と狹隘性とを有つて居るならば、斯かる限定の下にある地域に於て營まれる未開人と此の地域に在る人及びものとの交渉了解が、幼少年時代の生活にあるとされた多面性具體性直觀性を果して示すであらうか？

未開人の有する概念は、凝縮せる直觀 (verdichtete Anschauung) に過ぎないと言はれて居ることは、彼等が自己の交渉の對象即ち彼等の生空間に於てあるものに就いて、具體的直觀的把握了解をなして居ることを指示するものでなければならぬ。例へばヴントがブッシュマン族の言語に就いて述べて居るところの如きは、此の凝縮せる直觀を具體的に示すものである。ヴントに依れば、ブッシュマン族の思想と言語とは、「全て具體的であり直觀的であつて」例へば彼は、親切に扱はれたとは言はず、或る人が彼に煙草を與へ、彼はこれを吸ふ、又或る人が彼に肉を與へ、彼は之を食して喜ぶと言ひ、虐待すると言はず、或る人が彼を打ち、彼は痛くて喚くと言ふ。即ち吾等文化民族が比較的抽象的な概念を以て表現することが、彼にあつては全て個々の直觀的心像 (Bilder) に分解さ

れる。何處に於ても思考は個々の對象に附着し、而して原始的言語は特殊な動詞的表現を缺くので、過去のものも行爲も、思考に於て所謂對象的心像の背後に退く。故に此の思考そのものを對象的思考と呼ぶことが出来る。原始人は形象とそれの個々の部分を見、そしてそれが目に映するが儘に、それを言葉に再現するのである。この故に彼は文法的範疇の區別も、また抽象的概念も、何等知るところがないのである。思想の繼續の中には、全く純粹な表象聯合のみが、知覺と經驗せるものの憶起によつて呼び起されるが儘に支配して居る。上述のブッシュマン族の話には、何等統一ある思想が表現されては居らず、心に映する (*innerlich angeschaut wird*) 順序に従つて、心像が心像に接して並んで居る。斯くてヴントは結論として、原始人の思考の「内容は……感性的直觀的なるものであつて、概念的ではない」と言ふのである。

未開人の言語が、極めて大なる語彙を有することは屢々報告されて居るところであつて、例へば、ラブランド人は種々の馴鹿の類に多數の言葉を有し、氷に對して二〇、あらゆる形の雪に對して二四一、寒いことを表はすに一一、氷結する及び解けるを表はすに二六の言葉を有つ^④。また最も原始的民族の一とされて居るフォイエルランド族の如きも、嘗てはその言語は何等の思想をも現はすこと能はざる幼稚なものとされて居たが、些細に調査した結果は、彼等の語彙が實に總計三二四三〇語に達することが知られた。シエークスピアが使驅する豊富な言葉の總體が、約一五〇〇〇語と

計算されることを思へば、右のフォイエルランド語の數は、確かに注目に値ひする。斯くの如き未開人の言語の語彙の豊富は、例へばラツツェルがオーストラリア土人の言語に就いて論じて居る如く、元來封鎖的に居住し、各々別々の言語を發達せしめ、同一對象にも異なる名稱を附して居た諸集團が、後に種々の原因よりして互ひに交はり、また相寄つて大なる集團をなすに至つても、猶以前の言語を方言として保持して居る爲めに、同義語が多いといふが如き事情によることもあるであらう。斯かる事情を顧慮しつつも猶ヘルツは、最も低い段階にある諸民族の言語が驚く可く大なる語彙を示す事實を、一部には彼等の思惟が、より具體的であつて抽象を缺き、それ故無數の具體的な現象に、特殊な言葉を作つたことに歸して居る。^⑦ 狭くして封鎖されたる地域に居住する未開人が、同一對象物との交渉を反覆する時には、その存在の種々なる特殊限定の一一が、その個別性具體性に於て直觀的に把握され、その一一に對して夫々特定の言葉を作ると共に、斯かる個別的存在の直觀的充溢に捉へられて、此等に共通なる普遍者の概念を樹立するに至り難きは、極めて自然的であると思はれる。他方また同様の交渉従つて同一の直觀的把握の反覆は、大なる記憶力と更に鋭き分類能力を生せしめる可きであり、充溢せる直觀鋭犀なる區別鮮かなる記憶は、表現形式の複雑と豊富となつて言語の世界に現はれる可きである。ヘルツはまた此のことを認め、ブッシュマン族の言語が、織細な構造を有することを述べて居る。^⑧ 但し此處に一つ注意を要するは、未開人が對象の把握に於て

示す此等の特質が、未開人社會の封鎖性及び狹隘性を基底とするものではなく、彼等の人種的素質に基づくものではあるまいかといふ問題である。併しながら、心的機能即ち感覺感情憶起聯想等の強度速度持續性等に關しては、本質的な人種的差異は、今日迄未だ確められては居ない。自然民族の感覺の鋭さを精密に確定せんとする多數の試みが行はれたけれども、それ等の結果は極めて相異し、全てに通ずる結論を何等下すことが出来ない。^④他方多くの素質は環境の影響の下に成り立ちまた左右されることは明かにされて居るが故に、右の如き未開人が周圍のもの把握に於て示す諸々の特質を、未開人社會の地域的限定に歸するは不當ではないであらう。

未開人がその交渉を持つ對象の存在に就いて、右の如き複雑にして充溢せる直觀を持ち、従つてまた斯かる直觀に伴ふ微妙豊富なる情緒を感じるならば、彼等の言語が如何に繊細且つ潤澤であらうとも、彼等の思惟感情の内容は、到底言語を以て微細に描寫叙述することは出来ないであらう。併しながら彼等は、斯くの如き微妙豊富なる直觀をも、個人的に單獨に持つのではなく、文化民族から見では、極めて特殊にして個別的なる存在の把握にも、彼等には共通なる一定の交渉の仕方があり、之に従つて得る直觀的了解なるが故に、それは共にする了解であり、其の故にまた共に分たれ得る了解である。それは詳細緻密な描寫叙述によつて初めて傳達されるべきものではなく、斯かる描寫叙述を絶する豊けさを有つものながら、同一集團の成員には、多くの言葉を費す必要なく、只何

に就いての了解を「共に分つ」べきかを指さし又は名ざせば、それで足りるべきである。これ未開人の相互了解は、その内容の無限なる充實にもかゝはらず、生活空間の擴大されたる現代文化民族のそれとは異り、本來沈黙の了解 (stillschweigendes Verstehen) であると言はれる所以であらう。

自然民族の言語を絶する充溢を有する體驗内容が、沈黙にも等しい僅かの言葉によつて、傳達され得るのは、其の僅かな言葉を聞くものが、此の言葉を聞くことを機縁として、此の言葉を發せる者と同様な、複雑豊富なる内容を意識し得ることに基づく、従つて彼等未開人にとつては、此の複雑豊富なる體驗内容も、言語を絶するものではなく、むしろ極めて簡單なる言葉を以て盡くされるものである。即ち未開人は交渉の對象を名ざす一一の言葉に於て、極めて直觀的に充實し、鮮明にして生動性を帯びた了解従つて意識内容を持ち得るのであつて、此の直觀的意識内容の鮮明性と生動性とは、之に伴ふ情緒を激しくし、生氣に満ちたものたらしめる。元來美的とは、知覺に關するの謂であり、藝術的なるものとは直接直觀に於て喜びを與へるものであらう。美的受用とは直觀されたものに於ける喜びであり、美的感情とは直觀表象に基づく感情であるとするならば、一般に藝術的體驗は、直觀的意識内容の豊富充溢と、之に伴ふ情緒の複雑多様とを基底とすると云ふことが許されるであらう。故に藝術的體驗に於ける充溢せる直觀的要素と、これに伴ふ情緒の色あやなるニュアンスとを引起す力を詩力 (vis poetica) と呼ぶならば、未開人の言語も亦一種の詩力を有するも

のであり、此の未開人の言語の詩力は、未開人社會の地域的封鎖性と狹隘性とに基づくと考へることが出来るであらう。

此の未開人の言語の詩力は、やがてまた言語の魔力 (*vis magica*) となる。詩力によつて生せしめられる心像と情緒との鮮明性生動性の故に、ものの名を口にしまは耳にする時は、そのものが眞に現前し、之を知覺するに近い心的影響が感せしめられるであらう。従つて魔神鬼神の名もそれが口にされる時は、此等の魔鬼の直觀像が意識に浮び、此のことはやがて魔鬼を現前せしめると等しい効果を持つが故に、一般に魔鬼の名を口にすれば、之を呼び出すと考へられ、茲にもこの名稱は一般に、それが名ざす對象を呼び出す魔力を有つと信せられるに至るは、極めて自然である。斯くて未開人社會にあつては、例へば死や魔神の名を口にするを怖れ禁じ、また人を助け福を與へる靈の名を、その集團の成員以外のものに秘し、その惠福を集團以外の者に奪はれることを防がんとする現象を生ずるに至るのである。^①併しながら未開人の魔靈に就いての觀念が、超感性的のもの例へば息吹或ひは影像の如きであるならば、具像的直觀的なる心像と結合することによつて現はれるべき言葉の魔力は、此等の魔靈に就いて現はれ得可き根據を缺くであらうが、斯かる非直觀的なる靈の信仰は、最も原始的な社會にあつては未だ知られざるものに屬し、其の確かな痕跡の存在は、未だ一つも證明されて居ない。斯かる靈は、最も原始的な時代からトーテム時代への移り行きの特質を

なす徴標をなすものである。^⑩ヴントは原始人の思考内容を二つの領域に分つ。其の一は直接の知覺から意識に流れ込む諸表象の貯へである。日常知覺の對象となるものが原始的思考の到る所に頻出するのは即ち之である。第二の領域は直接の知覺には與へられず、手短かには情緒から生じ來るものと言ひ表はし得可きものである。此の領域は、直接の觀照の到達し得ざる、假令依然として感性的表象と固く結び着いては居ても、本來超感覺的なものである。ヴントは之を神話的思考と呼ぶ。これは知覺に與へられたる物や過程に、新たな知覺され得ない形象を附加するのであつて、可視の世界の背後なる不可視の世界に屬するものである。^⑪併しながら此の第二の領域も、その構成的基底として第一の知覺表象の領域を有し、之と密接に結合されて居る。而して此の第二の領域が情緒から生ずると言はれるのは、激しい情緒の活動を伴ふ事を示し、これは基底たる知覺表象と之の想像的變容附加より成る超實在的形象の表象とが大なる直觀性を有つによると解せられる。斯くて神話的思考と結合すべき言葉の魔力は、その詩力即ち直觀性に、従つて社會の地域的限定に基くと考へられる。以上は幼少年時代が持つ地域的社會圈の限定と同様なる限定を、時間的に見て最も明確に廓大して示す時代の社會集團に就いての考察であるが、更に性別に就いて見れば、女性はその生活空間に於て、幼少年時代と同様の限定の下にあることが見出される。

女性の生空間の限定を原始時代に於て示すは、母系及び母權の事實である。人類社會發展の初期

に於ても、廣い地域に於て營まれる狩獵漁業は多く男性に任せられ、女性も男性程此の事に専らでなかつたことが想定されるのであるが、人類が農耕の段階に到達した時に、主として農耕に従事したのは女性であつて、男性は猶狩獵其の他の事に當つて居た。然るに農作物の收穫は、狩獵の收得物に比してより確實である。此の點よりして男性は經濟的に女性に依存すること大なるに至り、女性の權力が漸次増大するに至るは自然の勢である。しかのみならず、女性は今や經濟的に最も重要な位置を占めるが故に、女子を結婚によつて手離すことは、その父兄の好まざるは當然である。

然らば男性が女性を得んとする時は、女性の氏族に入り、其處に共に住むか、又は女性を得る代償となるべき勤勞を此處で積まなければならぬ。斯くて初期の農耕時代には、所謂勤勞婚又は招婚婚が一般的な結婚形式となるのである。既に婚姻が招婚の形式に於て行はれ、夫が妻の氏族と共に生活する以上、氏族内の權力は妻の父兄によつて握られ、此の權力に妻が配與し、夫はむしろ妻に従屬する位置に立つに到るも、免れ難きところである。斯くの如く經濟的權力的に、女性の位置が男性のそれよりも上に立つ時は、彼等の子供が女性の系統を以て辿られ、また家族の財が女子の系統を辿つて傳へられることも自然である。以上の如く兩性の經濟的活動の分化に基いて、母權及び母系制が成立したことは、多くの人々の認めるところであるが、此の分化に於て女性が従事した農耕は、女性をその農耕地に繫縛し、女性の生空間を此の農耕地内に封鎖した、而して此の農耕地が、

男性が狩獵漁業に従ひつゝ、彷徨する地域より、遙かに狹隘なるは言ふを俟たない。即ち母權及び母系の成立は、女性の生活空間の封鎖性狹隘性と不可分離的に結合して居るのである。

農耕が専ら女性によつて行はれたのは、初期農耕時代のみであつて、此の時代が過ぎて男性の女性に對する經濟的從屬が止むと共に、母權及び母系は漸次消滅したけれ共、女性の生空間の限定は依然として存続した。家庭生活が發達し複雑化するに従つて、家庭内の仕事が女子の任務となり、女性が家の中に繫縛されたことは、改めて言ふを要しない。日本語は今も妻を家内と呼び、漢語は古く郷里の語を以て妻を意味した。郷里は自己の居る所即ち居住地であつて、男性は此處を去つて遠行することあるも、妻は斯かる事なく常にその家の在るところを離れなかつたが故に、居住地より轉じて郷里が郷人を意味し、郷人の代表的なるものとして遂に妻が郷里と呼ばれるに至つたことは明白である。ドイツの古い手工業者の諺が「旅をして來ない職人は、旅をして來た乙女に等し」と言ふのも、⁽¹⁶⁾女性が水平移動をなさざることを本質とし、女性の生空間が狭く封鎖的に限定されて居たことを表現するものに外ならない。

右の如く女性は原始的農耕の段階以來、狭くして封鎖的な地域内に生活を營んで來た。故に女性は此の地域内にある限られた人及び物に對して、多面的にして細部に亙る交渉を重ね、之等交渉の對象について具體的直觀的な了解を持ち、鮮明にして生氣ある表象を持つに至るべく、従つてまた

斯かる表象に伴ふ情緒も複雑にして活氣に満ちたものでなければならぬ。また女性は斯く對象の具體的個性を把握するが故に、對象をよくその個性に應じて扱ひ、對象の微妙なる點にまで配慮を及ぼすことが出来る。一般に女性が感情的でありまた繊細であるとされるのは、斯かる事情に基くのであらう。同時にまた他面に於ては、女性は狭い自己の生空間の外にあるものとは、何等交渉を持つことなく、従つて之に就いては何等の了解をも持ち得ない。此の故に自己の周圍にある直接交渉の對象のみならず、自己の生空間の外なる廣い世界に在るものの、相互の關係異同を明かにして、此等に共通なるものを抽象し、又此等の複雑多様なもの間にある系統秩序を把握するが如きことは能くしないのも自然である。しかのみならず、自己が直接交渉を繰返して居る對象には馴れ親しみ、之を扱ふに巧みなるが故に、之を愛好し之に執着すると共に、自己が交渉を持つこと少きものには、何等親しみを感せず、之を扱ふに拙劣である、従つて之を嫌忌し排斥せんとする傾きを示す。斯くて女性の了解好悪は、自己の限られたる生空間によつて嚴密に限定され、此の範圍外にあるものに對しては、極度の主觀的偏局的なる無理解嫌忌を示す。此處に女性が非合理的であり偏狹であるとされる所以があるであらう。

女性の特質と女性の生空間の限定との聯關の一斑は、女性と言語及び文藝との歴史的關係に於て窺はれる。歐洲中世の教養ある社會即ち上層階級にあつては、周知の如くラテン語が文章語として

用ひられたのであるが、茲に只一つ例外をなす領域があつた。それは即ち叙情詩特に戀愛詩の領域であつて、此處には方言が支配した。^⑩これは何故であらうか？元來叙情詩の生命たる微妙纖細にして豊富なる情緒は、内容豊かにしてしかも直觀的であり生動的なる表象に伴はれ、斯かる表象はものの具體的存在の直觀的了解把握を根柢とするのであるが、此の具體的個性を成立せしめた交渉の仕方は、夫々の地域的社會圈によつて相異し、一地域に支配する様式従つて言語を以てしては、他の地域に於ける存在の具體的直觀的把握表現は不可能であり、また斯かる地域的特殊性を無視除外し、より廣い地域に共通普遍なるものを抽出し之を對象とする交渉の仕方従つて言語によつては觸れられない。叙情詩が存在の具體的直觀的把握と結合する以上、地域的に相異する様式の言語、即ち方言と結合するは當然である。これ即ち、外來語は一般に母國語よりも魂なく、従つて叙情詩の如きには適しないと云はれる所以である。^⑪中世歐洲社會の身分的構造は、各地方の上層に共通な行爲様式と、これによつて成立つ存在を表現すべき共通の言語とを生せしめたけれ共、下層民の行爲様式は、夫々の地方によつて互ひに相異して居た。従つて夫々の地方はあらゆるものに於て獨自の存在を持ち、之を表現すべき獨自の言語としての方言を持つて居た。然るに女性は下層民と等しく、自己の居住地を離れて他國に赴き、又は他國人と接觸すべき機會少き家居の生活を送つて居たが故に、夫々の土地に特有なる存在を、具體的直觀的に了解し、此の了解に基づく自己の意識内容

や他人のそれをその地方の方言を以て表現し、また把捉し共に分ち合つて居た。斯かる具體的直觀的瞭解を表現すること能はざるラテン語を以て、之を解せざる女性に宛てた詩を作ることが無意義なるは言ふを俟たない。斯くて方言によつて歌はれた戀愛詩乃至叙情詩が、第一にとは言へないけれ共併し極めて屢々而してまた根強く、正さにフランス、イタリ、ドイツに於て、ラテン語に換へるに自國語を以てし、遂にこれを文藝語として昇華せしめた。特殊なる言語を以てする文藝の發達は、此の言語を共有する社會集團に特有なる感情、また此の言語感情を共有することによつて生ずる共屬の意識と感情の發達を促進する。これ即ち「言語に於て方向づけられたる民族感情の形成」であつて、女性は叙情詩を透して此の民族感情の形成に參與し特殊な働きを演じたのであつた。^⑧斯かる働きを演ずるに至つた原因は、正さに女性の生活の地域的限定に基くその存在把捉の具體的直觀性と、地域的特殊性への繫縛に外ならない。有史以前以來時に消長ありつゝも連續し來つた女性の生活の地域的限定も、近代産業の發達その他に基づく社會の變革によつて、今や漸次崩解せんとして居る。女性が男性と等しく廣く活動地域を持たんとすることは、必然的に長く女性に特有なる行爲の様式たりしものを、即ち思惟感情意欲の女性らしき型を女性から奪ひ、從來とは異なる型の女性乃至は非女性を作り出すであらう。

以上を以て、故郷の基底たる可き幼少年時代の生活が持つ地域的限定を、時間的空間的に擴大す

る未開人社會及び女性の生活に於て、此の限定が人と人及び物との交渉に與へる特質の一瞥を終り、次に斯かる特質を有つ生活を基底とする故郷とは如何なるものであり、また之と郷土その他の地域的社會圈との關係如何の問題に移り行かなければならない。(未完)

- ① P. Barth, Die Nationalität in ihrer soziologischen Bedeutung, Verhandl. d. Deutschen Soziologentage, II. Bd. 1913, S. 22.
- ② H. Ammann, a. a. O. S. 100, 102.
- ③ W. Wundt, Elemente der Völkerpsychologie, 2. Aufl. 1925, S. 72 ff.
- ④ F. Hertz, Rasse und Kultur, 3. Aufl. 1925, S. 122.
- ⑤ ibid. S. 130.
- ⑥ F. Ratzel, Völkerkunde, 2. Aufl. 1. Bd. 1894, S. 318.
- ⑦ Hertz, a. a. O. S. 122.
- ⑧ ibid. 128.
- ⑨ R. Thurnwald, Psychologie des primitiven Menschen, Handbuch d. vergleichenden Psychologie, I. Bd. 1922, S. 168, 172.
- ⑩ M. Geiger, Beitr. zu Plinonm. des isthesischen Gemusses, Jahrb. f. Ph. u. plinonm. Forsch., I. Bd. 1913, S. 567; S. Witasek, Grundzüge der allgemeinen Ästhetik, 1904, S. 66, 77 ff. 105 ff. 122, 127, 157, 181, 186, 195.
- ⑪ H. Ammann, a. a. O. S. 22, 114 f.
- ⑫ W. Wundt, a. a. O. S. 82.
- ⑬ ibid. S. 74 f.
- ⑭ F. Müller-Lyer, Die Familie, 1921, S. 95 ff.
- ⑮ F. Tönnies, Gemeinschaft u. Gesellschaft, 4. u. 5. Aufl. 1922, S. 158.
- ⑯ R. Michels, Die Historische Entwicklung des Vaterlandsgedankens, Verh. d. Deutschen Soziologentage, II. Bd. S. 143.
- ⑰ H. Ammann, a. a. O. S. 57 f.
- ⑱ Verh. d. Deutschen Soziologentages, II. Bd. S. 51.